

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
2016.11
第74号

平成二八年度企画展「公文書で見る秋田の石油開発」後期展を、二階特別展示室にて開催中です。ぜひご覧ください！

「奥州十三湊」

日之本將軍の正体

―アーカイブズ講座より―



永享七年（一四三三）

に焼失した若狭国羽賀寺再建にあたって、「奥州十三湊日之本將軍」が莫大な錢貨を投じたこと記す、羽賀寺所蔵の勸進帳と縁起がありま

まず「羽賀寺文書」のうち①永正十一年（一五一四）卯月日羽賀寺本堂上葺勸進帳写〔青〕二一一一八六）、②本文は誠仁親王筆で、奥書は慶長五年（一六〇〇）に後陽成天皇が書いたという羽賀寺縁起〔青〕二一一一八八）、この二つは、「奥州十三湊日之本將軍」を誰だと記していません。②は「奥州十三湊日之本將軍」の割り注に「道号高貨山賢機」とありますが、道号は多額の寄付行為、もしくはそれを含めた富栄えていることにちなんだようで、人物を特定する手がかりとはなりません。

けられますが、③を遠藤説は、天正初年成立とします。それが正しいか検証してみましよう。まず羽賀寺の再建を命じた「華頂要略」天正一二年（一五八四）六月一〇日正親町天皇繪旨写〔青〕二一一三〇四）に「早被任由緒、十三湊被告申」とあります。この頃、朝廷も羽賀寺も「奥州十三湊日之本將軍」が誰の先祖かわかっていません。

次に③で永正の再建を行ったとする「長井雅楽頭」ですが、この人物は文禄二年（一五九三）、若狭国内を与えられた木下勝俊の家中です（その挙証として、『福井県史』資料編9中・近世七所収「桑村文書」九〇一五・一七〇一九号及び「長源寺文書」三九・四一〇号）。勝俊は豊臣秀吉の甥で、関ヶ原の戦いで西軍を裏切り、東軍の勝利に貢献した小早川秀秋の兄です。このような「史実」のねつ造がなされたのは、勝俊が関ヶ原の戦いに際して東軍方として鳥居元忠とともに守備をしていた伏見城を放棄したために改易された慶長五年（一六〇〇）以降でしょう。

さらに③に「康季改山為本浄、取山為我号、名曰鳳聚院」とあります。しかし「羽賀寺文書」寛永二年（一六二五）五月三日秋田実季寄進状〔青〕二一一二三七）に「羽賀寺者、某実季先祖康季（道号高山賢機）依再興之地」とあって、この時、「鳳聚院」の院号を実季は知りませんでした。院号の使用はこれ以降でしょう。

これらから、③の成立は寛永二年以降と推定されます。そして「奥州十三湊日之本將軍」を安倍康季と比定したのは、天正一二年以降寛永

料ですが、遠藤巖氏「羽賀寺縁起の成立と展開―奥州十三湊日之本將軍認識の問題を念頭に―」（前川要・十三湊フォーラム実行委員会編『十三湊遺跡―国史跡指定記念フォーラム―』、考古学リーダー7、六一書房、二〇〇六）による書誌的検討によりながら「奥州十三湊日之本將軍」に関する卑見を述べてみましょう。

※史料の多くは『青森県史』資料編中世二安藤氏・津軽氏関係資料に収録されていますが、同書によったものは『青』二―資料番号と略記しました。

次③本浄山羽賀寺縁起〔青〕二一一一八七）、④承応二年（一六五三）以後成立の本浄山羽賀寺仮名縁起〔青〕二一一一八九）、⑤嘉永二年（一八四九）成立の本浄山略縁起〔青〕二一一一九〇）の三つは、「奥州十三湊日之本將軍」を安倍康季とします。安倍姓の下国（しものくに）康季は、永享頃に実在した人物です（『熊野那智大社文書』陸奥国下国殿代々名法日記、『青』二一一四一九）。通説では康季は織豊期に秋田地方の大名だった秋田実季の先祖で、十三湊を本拠としたといわれています。ですから「史実」とまったくあわないわけではありません。

しかし「奥州十三湊日之本將軍」を安倍康季とするのは、近世に成立した史料のように見受

二年以前と推定されます。もう少し下限をさかのぼれば、実季の手によって羽賀寺が再建された文禄四年(一五九五)頃になるのでしょうか。

以上のことから「奥州十三湊日之本將軍」を下国康季としたのは、どんなに早くても一六世紀末期です。また一五・一六世紀の羽賀寺に関する史料として利用できる勅進帳や縁起は①・②だけで、③・⑤は後世の潤色を多く加えており、史料批判が相当必要です。

①・②では、「奥州十三湊日之本將軍」を誰と特定していません。斎藤利男氏「日本・日の本と日の本將軍」(羽下徳彦氏編『中世の地域と宗教』吉川弘文館、二〇〇五)によりますと、天正以前に「日之本將軍」とよばれたのは「伝承」を多く残す平将門です。この他に津軽安藤氏の安藤五郎も天正年間成立の説話集でよばれていました(『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』建長寺地蔵夷島遊化事、『青森県史』資料編中世三北奥関係資料一八一三)。いずれも本人自らが「日之本將軍」と称していません。

①に「聞説、奥州十三湊日之本將軍作檀契寄巨多之捧」とあります。「聞説」つまり伝聞です。寄付を受ける側が作成した文書において、伝聞であっても③・⑤のように実名を明記するものではないでしょうか。

敢えて匿名にしたのだという見方もあるでしょう。しかし次のようにも考えられます。「奥州十三湊日之本將軍」が関わった羽賀寺再建で永享七年(一四三五)に焼失した寺院に本尊がおさめられたのが文安四年(一四四七)ですか

ら、その道のりは容易ではありません。室町期から織豊期の羽賀寺再建は、総じてそうです。調達困難の「史実」を隠すために「奥州十三湊日之本將軍」という架空の人物をつくったとも考えられます。「奥州十三湊日之本將軍」は、十三湊が蝦夷島との交易で繁栄していた「史実」に基づいているのでしょうか。

①・⑤は、「日之本將軍」論の一つの材料にはなりません。しかし「日之本將軍」と下国氏とが結びついたのは文禄の羽賀寺再建時で、「奥州十三湊日之本將軍」を実季が自らの祖とする下国氏としたからなのです。

実季の時から秋田氏は羽賀寺が関係を持つようになる、それは「史実」です。しかし室町期の下国康季は、羽賀寺再建に多額の援助をしていません。ですが織豊期に史実が捏造されまます。どういう経緯でそうなったのか、史料は語りませんが、羽賀寺側のようにです。その後、秋田氏の系図に康季が羽賀寺再建を行ったと記されることになったのです。

余論

安藤・安東・下国・上国・湊

御内人や奉公衆に「安東」氏がおりました。しかし彼らは、安倍姓ではありません。つまり織豊期は秋田地方の大名で、江戸期に三春藩主である安倍姓秋田氏の祖ではありません。

鎌倉後期、津軽地方に安倍姓の一族がおりま

した。こちらは「安藤」氏です。一般にこちらの「安藤」が三春藩主の祖になります。より正確に言えば、「安藤」氏のうち南北朝期から「下国」氏とよばれるようになる一族があらわれます。

右は津軽地方のことで、秋田地方では「安東」氏とよばれていたとする説があります。そのためかどうかわかりませんが、戦国期から織豊期にかけて秋田地方で活躍した愛季を「安東」愛季と表記します。しかし遠藤巖氏「戦国大名下国愛季覚書」(羽下徳彦氏編『北日本中世史の研究』吉川弘文館、一九九〇)等で述べられたように、愛季は「安東」とよばれた史料はありません。「下国」愛季なのです。津軽「下国」氏との関係ですが、「下国」氏は十三湊を拠点に繁栄していましたが、一五世紀中期に南部氏に敗れ、その後の細かい経緯は省略しますが、桧山に逃れたというのが通説です。この系統は桧山「安東」氏とよばれますが、桧山「下国」氏でなければなりません。愛季の子が実季で、秋田氏を称し、今日に至ります。

これに関連して、津軽安倍姓は「下国」で、秋田安倍姓は「上国」という説があります。小島鹿島や現在の秋田市を拠点とした湊「安東」氏のことです。愛季の時に、桧山「下国」氏と湊「安東」氏は統一されます。しかしこの系統は「湊」とよばれていましたが、「上国」や「安東」とよばれた史料を発見できません。こちらは秋田「湊」氏と呼んだ方がよいでしょう。